

トルコ語と日本語の V+V 型複合動詞と語形成

—残された問題—

栗林 裕

岡山大学

1. はじめに

日本語では V+V 型の複合動詞が非常に豊富にみられるのに対して、同じ OV 型語順の言語で、同じ膠着的形態を持つトルコ語では V1 (動詞前項) +V2 (動詞後項) 型の複合動詞の数が非常に限られている。この問題に対して、筆者はトルコ語では名詞部や動名詞部に組込まれた文法情報 (特質構造, 格付与の情報) を直接的かつ容易に取り出せる言語だが、日本語はトルコ語ほど容易に取り出せない言語であることを支持する証拠を提示し、両言語における複合動詞化の異なりは形態構造の独立性や語順の厳密さの違いなどに原因があり、他のアルタイ型言語でも共通する仕組みである可能性があることを論じた (cf. 栗林 2014)。本稿では、一連の研究発表 (平成 22 年度文学部プロジェクト研究「コミュニケーションの本質と実践に関する総合的探究」第二回目研究会 2010 年 10 月 27 日 岡山大学, 国立国語研究所 レキシコンプロジェクト研究会 2011 年 12 月 24 日 関西学院大学梅田キャンパス) やシンポジウム (平成 23 年度文学部プロジェクト研究「コミュニケーションの本質と実践に関する総合的探究」国際共同セミナー コミュニケーションの中でつくられていくことば —言語の接触・文法の形成— 2012 年 2 月 21 日 岡山大学) で論じた V1+V2 型の複合動詞の諸問題の中で、十分な結論に至っていない項目や公刊していない言語資料を中心に取上げ、今後の課題として提起することを目的とする。また、ダイナミックなコミュニケーションの場で作られ、廃れる言語表現を複合動詞の分析に活用する視点も重要であることを指摘する。つまり、第二言語獲得の過程で産出される目標言語の誤用と同様、目標言語が若者ことばとして取り入れられるときにみられる言語的特徴も対象言語研究のための重要な糸口になりうることを示したい。

1.1 トルコ語の文法的特徴

トルコ語とはユーラシア大陸全域に分布するチュルク諸語のなかで南西グループに属し、最大の話者数をもつ、トルコ共和国イスタンブール方言のことを指す。形態的膠着性などのいわゆるアルタイ型の言語構造を持ち、基本語順は目的語－述語であるが、口語においては比較的自由な語順をとり、情報構造的な要因から述語より後置された要素も広く許される。また主語と述語の間で人称による厳密な形態的一致現象がみられ、述語の末尾に人称接辞が付加される。数に関しても主語と述語間において形態的一致がみられるが、必ず

しも厳密なものではない。また、修飾名詞と被修飾名詞の間でも人称や数に関する形態的一致がみられ、被修飾名詞語幹に所属人称接辞が付加されるが、数に関する一致は厳密なものではない。

2. トルコ語と日本語の語形成の異なり

トルコ語の複合名詞を含む名詞修飾構造は OV 基本語順を反映して、修飾名詞（非主要部）が被修飾名詞（主要部）に先行するが、日本語とは大きく異なる性質もみられる。まず基本的にはトルコ語の名詞修飾構造は以下の三つに分類することができる。

- 1) 非主要部に属格接辞が付加され、主要部に所属人称接辞が付加される場合

o-nun araba-sı
s/he-GEN car-POSS.3SG
‘彼/彼女の車’

- 2) 主要部に所属人称接辞が付加される場合

Japon araba-sı
Japanese car-DEF
‘日本車’

- 3) 主要部に所属人称接辞が付加されない場合

altın saat
gold watch
‘金時計’

1) は全体で句を形成しており、複合語とはいえない。また3) はいわゆる複合名詞に相当するが、出現頻度からすると一番多いタイプは2) である。語形成の観点から特徴的なのは、2) にみられるように主要部に人称接辞が付加されることで、複合語であるにもかかわらず語の内部要素である主要部が指示性を持つ点である。通常、「語」としての一般的性質として、その内部が指示性を持つこと、あるいは外部に指示物を持つことは許されないが、トルコ語の最も多いタイプの名詞複合語はこのような性質を保持している。なお別の分析では、複合語の主要部に付加される接辞を単に複合語化表示とするものもある。この性質と関連して、トルコ語には次のように特徴的な語彙的語形成がみられる；①文をベースに形成される複合名詞、②斜格を保持した複合名詞、③照応要素が出現する語彙化されたイディオム。

(1) [[imam-bayıl-dı]_s]_N

①の例

priest-fall-PST

‘坊さんが倒れた (ナスを使った料理名)’

(1)は、内部に屈折要素を含み「文」を構成しているが、全体のカテゴリーは名詞に派生変化して、最終的に料理名になっている例である。主に固有名詞としてこのような例がみられるが、語彙化しており、頻度としては多くない。

(2) [[söz-ün-e sadık]_s]_A

②の例

word-DEF-DAT faithful

lit. 言葉に忠実

‘言うことを守る’

(2)は、内部に与格補語を含む連体節を成しており、本来主要部である修飾語と共に用いられるものであるが、連体節が主要部無しで、形容詞や名詞として用いられる例である。形容詞が名詞として用いられることはトルコ語でよくみられる現象である。語形成の観点からは、指示的要素 (DEF) を含む補語が支配する格 (ここでは与格) を表出し語彙化しているところが特徴的である。

(3) [sahan-da yumurta]_N

②の例

pan-LOC egg

lit. フライパンで卵

‘卵焼き (料理名)’

(3)は、複合名詞の非主要部が格接辞を持っている例である。通常、複合名詞の非主要部は格が付加されない。しかし、この例では位置格があらわれ、全体が語彙化して固有名詞になっている。語彙化している例なので、頻度数は限られている。

(4) [kar-dan adam]_N

②の例

snow-ABL man

lit. 雪から男

‘雪だるま’

(4)も、(3)の類例であるが、奪格とともに非主要部名詞が現れる例である。

(5) can-ım sıkıl-dı

③の例

soul-POSS.1SG squeeze-PST

lit. 私の魂が絞られた

‘私は退屈した’

(5)は、イディオム表現の内部に指示的な要素が付加されている例である。以上の例から、トルコ語の語形成において特徴的なことは、1) 主部と述部を持つ文構造がベースになった語彙化した表現がある点、2) 複合語の内部に格等の曲用接辞があらわれる点、3) 語彙化した表現の内部に指示的要素が現れるという点である。これらの特徴はいずれも「語」の一般的性質からは逸脱するものである。

3. 特質構造

Pustejovsky (1995) は語彙構造の一部として特質構造という概念を提案した。本稿では影山編 (2011) に従い、特質構造とは「モノの性質を表すもの」であり、4つの役割を持つとする。

構成役割：その物を構成する部分、中身、材料など

形式役割：自然物か人工物かなど外的な属性

主体役割：その物を産み出す原因や成り立ち

目的役割：本来的に意図された目的や機能

英語の例文(6)では、「ケーキを作る」の意味と「ケーキを食べる」の意味に曖昧であるが、特質構造の考え方によると、主体役割が読み込まれた場合は、「ケーキを作る」の意味になり、目的役割が読み込まれた場合は、「ケーキを食べる」の意味になるとする。このように英語の文の意味的曖昧性は特質構造の反映とすることで説明される。

(6) begin the cake

(7) a. ケーキを焼き始める ケーキを作り始める

b. *ケーキを始める

一方、日本語の場合は例文(7b)のように、名詞に本動詞である「始める」を後続させるだけでは意味を成さず、補助動詞である V1 をさらに前続させ V1+V2 の構造を作らねばならない。このような日本語と英語の異なりについて影山 (2002) は、次のような提案を行った。

名詞の特質構造の中身が、英語では比較的「見えやすい」のに対して、

日本語では不透明である。

この観点では、日本語に V1+V2 型の複合動詞が豊富にみられるが、一方英語では限定的であるという事実を捉える事ができる。影山 (2002) では、さらに考察を進め、単純名詞であっても「始める」を後続させることができる場合とできない場合があることを指摘している。

- (8) a. *市長を始める *校長を始める
 b. ラーメン屋を始める 高校教師を始める
 c. 冷やし中華を始めました 牡蛎フライを始めました

(8a)は「始める」を後続できないが、(8b,8c)では後続させることが可能である。この違いについて、影山 (2002) では、主体役割に記載された行為と、目的役割に記載された行為がともに主語の意志によって行われ、しかも両者に時間的な隔たりがなく、一体のものとして捉えられる場合には、名詞に「始める」を直接後続させることができるとする。つまり、この場合は英語のように V2 のみで文法的になり、V1+V2 にする必要はないのである。(8b)では、ラーメンは調理場で作られ (主体役割)、その場でラーメンが提供 (目的役割) されるため両者の時間的隔たりがない状況に合致する。そのことは、英語が意味に依拠した言語である一方、日本語は複合動詞化という形態に依拠した言語であることに繋がるものである。

3.1 主体役割と目的役割の非対称性

特質構造の観点からトルコ語を考察すると興味深いことがわかる。(9a-b)から、英語の場合と同じように名詞の主体役割と目的役割が読みとられることで、曖昧性が出ると考えられる。つまりトルコ語は特質構造の観点からは、日本語とは異なり英語に近い。

- (9) a. kek-e başla- トルコ語
 cake-DAT begin
 ‘ケーキを作り始める’
 ‘ケーキを食べ始める’
 b. kitab-a başla-
 book-DAT begin
 ‘本を書き始める’
 ‘本を読み始める’
 c. film-e başla-
 film-DAT begin
 ‘映画の撮影を始める’

- ? 映画を見始める'
 d. bilgisayar-a başla-
 computer-DAT begin
 'PC を組立て始める'
 '*PC を利用し始める'

しかし、トルコ語でも意味的曖昧性を生じる場合と生じない場合があることがわかる。(9a-b) は英語と同じように特質構造の役割の読み込みが生じることで説明ができるが、(9c-d) は、読み込みの際のなんらかの制限があることを示している。トルコ語とは異なり、日本語ではなぜ「ケーキを始める」がいえないのかという疑問に対して、ケーキの特質構造の中身が不透明であるため「食べ始める」という V1+V2 型複合動詞構造にして、意味を補う必要がある。このような分析が正しいものであるかどうかを検証するためには、V1+V2 型複合語が豊富でないとされるトルコ語以外のアルタイ型言語の状況を詳細に検討する必要がある。トルコ語のように、「始める」という補助動詞を付加した場合に、曖昧性が生じ、かつ V1+V2 型の複合動詞の種類が少ない場合は、特質構造の考え方をさらに推し進めることができる。これは今後の課題である。

また、(9c-d) から、名詞により特質構造の読み込まれ方に違いがみられることが分かった。このような類例は他にも認められるのだろうか？もし読み込まれ方に偏りがあるなら、これに関わる制限をさらに一般化できる可能性はあるのかということを考えなければならない。さらに、トルコ語では「本を始める」が可能だが、同じアルタイ型言語であるにも関わらず、日本語や朝鮮語では不可能なのはなぜか (cf. 塚本 2009) ? たとえば、「バナナを始める」や「万年筆を始める」は日本語でもトルコ語でも不可能である。

日本語の「授業を始める／授業が始まる」にみられる V2 の自動詞と他動詞の形態的対立による意味の異なりは、トルコ語では特質構造の読み込まれ方の違いとして説明が可能である。

- (10) ders-e başla-
 lesson-DAT begin
 lit. 授業に始める
 '(先生が)授業を始める'
 '授業が始まり, (生徒が授業を受け始める)'

しかし、受身化された場合には、曖昧性は消え片方の主体役割しか読み込まれないので曖昧性はなくなる。

- (11) ders-e başla-n-dı.

lesson-DAT start-PASS-PST

‘授業が始められた’

このような態の交替との相関をどう考えることができるだろうか？ 統語部門である種の抑制が働いているのであろうか，またその条件はどのようなものであろうか？ これらも残された問題である。

4. 格の表出

日本語の生成文法的研究では，「が／の交替の制約」と呼ばれる現象が活発に議論されてきた。簡単に述べると，(12a)にみられるように，従属節において目的語がある場合には主語が主格/属格の交替をしないという現象である。

- (12) a. [Taroo-ga/-*no Hanako-o susumeta] kaisya Japanese
 Taro-Nom/-Gen Hanako-Acc recommended company
 ‘the company to which Taro recommended Hanako’
 b. [Ali-nin Oya-yı tavsiye et - tiğ - i] şirket Turkish
 Ali-Gen Oya-Acc recommendation do-Rel.Participle-3.SG company
 ‘the company to which Ali recommended Oya’ =Miyagawa 2008: 例文(30)

4.1 理論的分析

ところが，「が／の交替の制約」は，(12b)のようなトルコ語の反例があることが指摘され，他動性の制約 (Transitivity restriction) として見直されるに至った (cf. Hiraiwa 2001, Miyagawa 2008)。トルコ語の(12b)では，日本語の場合とは異なり，従属節において目的語 (この場合は Oya) がある場合でも主語に属格を表示することができる。属格主語を持つ構文において，対格目的語が生じないという他動性の原則が必要な日本語のほうが，そのような原則が関与しないトルコ語よりも特殊なのだろうか？

- (13) a. [Sen-in bilgisayar-da makale-ler-in-i yaz-acag-ın]-ı duy-du-m.
 you-GEN computer-LOC article-PL-2.SG-ACC write-FUT-2.SG-ACC hear-PST-1.SG
 ‘(I) heard that you will write your articles on the computer.’
 (Miyagawa 2011 例文(41)を訂正)
 b. 太郎 が／*の 花子を 勧めた会社

生成文法の極小主義に基づく Miyagawa (2011) による分析では，この問題に対して，関係節化の際に述語に一致表示が表示されるかどうかの違いであるとする事で，言語間の差

を説明しようとする。具体的には抽象的な要素である D (限定辞) の主要部が主語を認可する D-lisencing (限定辞－認可) のダグル語 (モンゴル語系言語) と日本語のグループと, C (補文化辞) の主要部が主語を認可する C-lisencing (補文化辞－認可) のトルコ語のグループに分類する。これに加えて理論的な仕組みとして, さまざまな言語でみられる the subject-in-situ の一般化 (スペルアウトまでに vP はチェックされていない格素性の項を最大一つまでしか持つことができない) が仮定される。トルコ語は C (補文化辞) による属格主語の認可により主語が移動し, 他動性の条件 (the subject-in-situ の一般化) の違反を免れるので, (13a) は適格になるとする。つまり, トルコ語は一致に関わる C (補文化辞) の存在により, 日本語とは対比されるというのが理論的な説明の要の部分になる。なお, 記述的には C-lisencing (補文化辞－認可) かどうかは一致表示が従属節内の述語に表示されるかどうかに基づく。しかし, すべてのチュルク系諸言語がトルコ語のように関係節内の一致表示の出現位置が述部になる訳ではない。(14a) のキルギス語の例にみられるように, 関係節構造で, 主語との文法的な一致表示が (14b) のトルコ語のように述語に表示されず, 主要部 (被修飾語) である名詞に表示されるチュルク語も多く, これらにはトゥバ語, カザフ語, カザン-タタール語なども含まれる (cf. Aygen 2006)。そして, この場合にも従属節内で属格主語と目的語は両立可能であり, C による主語の認可がなくても他動性の条件を免れている。換言するとキルギス語は D-lisencing (限定辞－認可) の言語であるにもかかわらず, 属格主語名詞と目的語が関係節内で両立するのである。

- (14) a. Men-in suu kaynat-kan yer-im. (Konkobaev, K. p.c.) キルギス語
 I-GEN water boil-PRT place-POSS.1SG
 ‘私がお湯を沸かした場所’
 b. Ben-im su-yu kaynat-tıg-ım yer. トルコ語
 I-GEN water-ACC boil-PRT-POSS.1SG place
 ‘私がお湯を沸かした場所’

また, 次の節で論じるように対格名詞などの項の表出は関係節化される場合に留まらず, 文や句が名詞化される場合全般に広がる現象でもある。Miyagawa (2011) の提案が真に正しいものであるかを検証するためには, キルギス語のように述語に一致表示が出ないようなチュルク語を含め, 関連諸言語の関係節等で属格主語と対格目的語が両立可能な状況の検討が必要である。もし, そのような例があれば Miyagawa (2011) で提案された分析は成立しないことになり, 理論的な修正が必要になる。

4.2 動名詞部の強い格付与能力

トルコ語では, 外来語起源の動名詞は単独でも, 動詞化する補助動詞等の支持なしに十分な格付与の能力を持つ。次の例ではアラビア語起源の動名詞が対格を直接支配している。

(15) Bursa-yı [ziyaret]_{VN}-im.

-ACC visit-POSS.1SG

lit. 私の(行為者の読み)ブルサを訪問

Lewis (1991)

次の例ではアラビア語起源の動名詞が主格（ゼロ表示）を直接支配している。動詞化する補助動詞等の支持がなくても文法的である。

(16) banyo [hazır]_{VN} !

bath prepare

lit. 風呂が準備！

‘お風呂が準備できたよ！’

また動名詞が直接付与できる格は対格に限らない。(17)ではアラビア語起源の動名詞が与格を支配している。

(17) para-ya [ihtiyac]_{VN}-im var.

money-DAT need-POSS.1SG exist

lit. お金に私の必要がある

‘私にお金が必要だ。’

第二言語獲得の場面では、母語の文法的性質が引き継がれる様子もみられる。(18)-(19)においては外来語起源の動名詞 (ihtiyac) や本来語の形容詞(gerek)が与格を支配しているが、その性質はそのまま非母語話者間で使用される若者ことばの中に取り込まれている。

(18) biraz [YASUMİ]_N'-ye [ihtiyac]_{VN}-im var. (トルコ人日本語学習者の若者ことば)

a little rest -DAT need-POSS.1SG exist

lit. 少し休みに(私の) 必要がある

‘(私には) 少し休みが必要だ。’

(19) fazla [SETSUMEI]_{VN}'-ye gerek yok. (トルコ人日本語学習者の若者ことば)

many explanation -DAT need NEG

lit. 多く説明に必要がない

‘いろいろ説明する必要はない。’

このように若者ことばのような即座に産出され、永続的に使用されないかもしれない言語

の体系をみることにより、動名詞部が強い格付与能力を持つなどの当該言語の本質的な機能の一端を探ることができる。

4.3 名詞化接辞と格

トルコ語にみられる 3 種類のアスペクトに関わる名詞化接辞は、それぞれ結果名詞形成の-Im やデキゴト名詞形成の-mA, -Iş に対応する(cf. Öztürk 2004)。

(20) a. Bina-nın/*y1 (*üç saat-te) yık-ım-ı.

building-GEN/-ACC (3 hours-in) destroy-NMZ-POSS.3SG

‘The building’ s destruction (*in 3 hours)’

b. Ali-nin bina-y1 (üç saat-te) yık-ma/ı-ı.

Ali-GEN building-ACC (3 hour-in) destroy-NMZ-POSS.3SG

‘Ali’ s destruction of the building in 3 hours’

Öztürk (2004)

(21) a. ジョンの数学の勉強

b. ジョンが数学を勉強:中

(20a)にみられるように、経過時間を示す時間の副詞は結果名詞形成接辞-Im とは共起しないが、(20b)にみられるようにデキゴト名詞形成接辞の-mA や-Iş は経過時間を示す時間の副詞と共起可能である。一方、日本語の「～中」にみられる屈折／アスペクトの要素は対格付与に深く関わる。日本語の名詞句内の目的語は(21a)のように属格「の」で表示されなければならないが、(21b)のようにアスペクトを表す「中」などの要素が付加されると、対格の付与が可能になり、全体として文の構造を保持することができる。トルコ語にも並行的な現象があり、統語的アスペクト主要部の設定の根拠となる (cf. Öztürk 2004)。デキゴト名詞形成に-mA, -Iş が関わる根拠をみることにする。

(22) a. Bina-nın/ *y1 (*sıkca / *sık sık / ?ara sıra) yık-ım-ı.

building-GEN/-ACC (often-ADV / often /sometimes) destroy-NMZ-POSS.3SG

‘建物のしばしばの破壊’

b. Ali-nin bina-y1 (ara sıra) yık-ma/ı-ı.

Ali-GEN building-ACC (sometimes) destroy-NMZ-POSS.3SG

‘建物のしばしばの破壊’

(22a)と(22b)の対比より、結果名詞形成辞Im は項構造を引き継がないが、デキゴト名詞形成辞-mA, -Iş は項構造を引き継ぐことが可能なことがわかる。つまり、(22a)のように-Im が付加されると文中要素に対格を付与することは不可能で、動詞全体は副詞的要素と共起しない

い。それとは逆に、(22b)のように -mA や -Is が付加されると文中要素に対格の付与が可能になり、副詞的要素と共起が可能になる。まとめると、結果名詞形成辞-Im はアスペクト表現と共起しないが、デキゴト名詞形成辞-mA, -Is は共起可能ということになる。

このような項構造の引き継ぎ／保持は、-mA や -Is などの名詞化接辞の有無だけでなく、外来語からのコピーを含む単純名詞にもみられる現象である。

(23) Bursa-yı/-ya ziyaret-im.

lit.ブルサ-を/へ 訪問-1.SG

‘(私の) ブルサへの訪問’

(23)ではアラビア語起源の動名詞が単独で対格や与格を支配している。このように、トルコ語の一部の複合名詞は日本語と異なり、単純主要部名詞からの項構造（格付与）の取り出しが容易であることが分かる。

5. おわりに

なぜトルコ語と日本語で違うのかということについて、トルコ語は名詞や動名詞に組込まれた文法情報（特質構造、項構造（格付与）の情報）を直接的かつ比較的容易に取り出せる言語であることを主張した。特に本稿では名詞部分の格付与が自由に行えることをみた。具体的には、トルコ語では補助動詞等の支持なしに動名詞部単独で格付与の能力を持つが、このような状況は他のチュルク系言語でもほぼ同様である（cf. Baker 2011）。それとは対照的に日本語はトルコ語ほど容易に文法情報が取り出せない言語である。例えば主要部が名詞である場合、要求されるそれぞれの項へ属格付加がなされ句の全体的な名詞化なども必要になる。このような日本語とトルコ語の異なりは動名詞部の独立性の高さと文法的一致の有無の違いによるものである。トルコ語では節全体が名詞化する場合、日本語のようにそれぞれの項に対する属格の付加による全体的な名詞化の必要がない。トルコ語では動名詞部から容易に項構造（格）の情報の取り出しができるので、他動性の制約を免れていること（cf. 4.1）や格表示がそのまま具現化した N+N 型複合名詞が存在すること（cf. 4.2）が説明できる。動名詞部の独立性が低い日本語では、これらは不可能である。

新しい動詞が創造されときのメカニズムを探るには、第二言語獲得における用例収集などは非常に参考になる。特に「若者ことば」の例を観察することにより、母語の中に目標言語が取り込まれる仕組みを探り、同時に母語の文法的特徴を浮き上がらせることができる。第二言語獲得に生じる誤用分析は規範からの逸脱として捉えるのに対して、本アプローチでは、むしろ逆に「若者ことば」を言語の仕組みを探求するための糸口として肯定的に捉えるものである。例えばトルコ人日本語学習者のコピーは動名詞部だけにみられるものではない。(24)はトルコ人日本語学習者の若者ことばの例であるが、語幹部分は日本語

に対応するトルコ語の語彙を用いるが、日本語のテ形に相当する活用形式と補助動詞部は日本語の語彙をそのままコピーしている。

- (24) unut-TE simat-ta. (トルコ人日本語学習者の若者ことば)
forget-GER finish-PFT
‘忘れてしまった’

つまり、文法の枠組みは V1+V2 型の日本語の形式であるが、V1 のみトルコ語の語彙を用いたハイブリッド構造を成している。トルコ語では日本語と比べて V1+V2 型複合動詞の出現が極端に少ないが、第二言語獲得において、どのような条件がそろえば V1+V2 型の複合動詞が出現するのであろうか？ 本稿で論じた結論の検証を日本語学習者の例文の観察を通してさらに深めていくことができると考える。

略記号

A: adjective, ABL: ablative, ACC: accusative, ADV: adverb, DAT: dative, DEF : definite, FUT: future, GER: gerund, LIT: literal, LOC: locative, N: noun, NMZ: nominalization, PART: participle, PASS: passive, PL: plural, POSS: possessive, PROG: progressive, PFT: perfect, PST: past, REL: relative, S: sentence, SG: singular, 1: first person, 3: third person, VN: verbal noun.

参考文献

- Aygen, G. (2006) Case and agreement in reduced versus full relative clauses in Turkic languages. In: Yağcıoğlu, S. and C. Ayşen (eds.) (2006) *Advances in Turkish linguistics*, pp.643-653. İzmir: Dokuz Eylül Yayınları.
- Baker, M. (2011) Degrees of Nominalization: Clause-like constituents in Sakha. *Lingua* Vol. 121: pp.1164-1193.
- Hiraiwa, K. (2001) On nominative-genitive conversion. *MIT working papers in linguistics* 39: pp.66-123.
- 影山太郎 (2002) 「語彙の意味と構文の意味 - 『冷やし中華始めました』 という表現を中心に -」 玉村文郎 (編) 『日本語学と言語学』 pp.101-111. 東京: 明治書院.
- 影山太郎編著 (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』 東京: 大修館書店.
- 栗林 裕 (2014) 「V+V 型複合動詞と語形成 - トルコ語から見た日本語 -」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端 - 謎の解明に向けて -』 pp.273-299. 東京: ひつじ書房.
- Lewis, G. L. (1991) *Turkish Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Miyagawa, S. (2008) Genitive Subjects in Altaic. *Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics* 4, *MIT Working Papers in Linguistics* 56: pp.181-198.

- Miyagawa, S. (2011) Genitive subjects in Altaic and specification of phase. *Lingua* Vol. 121: pp.1265-1282.
- Öztürk, B. (2004) *Case, Referentiality and Phrase Structure*. Ph.D. thesis, Cambridge, MA: Harvard University.
- Pustejovsky, J. (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 塚本秀樹 (2009) 「日本語と朝鮮語における品詞と言語現象のかかわり」 由本・岸本編『語彙の文法と意味』 pp.395-414. 東京：くろしお出版.